

'71.11月

井深対談

高い山を 親子で歩こう

ゲスト：石原 慎太郎

石原 慎太郎（いしはら・しんたろう）
参議院議員

あるきびしさを

井深 石原さんの、教育についての……お考えは、ま、大体のみ込んであるつもりなんですけど……いや、私はもう……。

石原 いやあ、本を書きましたらね、何か教育の権威の如く錯覚されてね（笑い）。わたしは、実にいい加減な親なんでして……あれはもう、全く思いつくままに書いたわけなんです。こんど、また、もう一冊、「魂を植える教育」というのを出しますんで……。また贈呈いたしますけど。

井深 ははーん。魂を……

石原 「魂を植える教育」というんです。続けて出版するみたいになりましたけど、それは出版社の方の事情で……前のが遅れてしまったんです。

井深 その方は、何という本でしたか……

石原 あれ、本屋が勝手につけてしまったんですけど……「スパルタ教育」とって……。決してスパルタ教育じゃなしに、子どもの個性っていうか、それぞれ違った割合で持っている柔軟性に応じて、しつけをしていく、っていうようなことを書いといたんですけど……。だから、いかに子どもを甘やかせるか、ということだって書いたつもりなんですけどどねえ。

井深 ああいう題をつけちゃうと……イメージがちょっとねえ。石原さんまでが、そういう思想であるかの如く、ねえ。広告の題名だけで印象を受けちゃいますから……。

石原 しかし、まあ、親が自分の責任で子どもをしつける……限り、どうしても子どもに対して、あるきびしさを持たなきゃ、できないでしょう……。

井深 そりゃそうですとも。

石原 いまは、みんな他人に任せっきりですから……その反動で、徹底的にきびしい教育が……非常に渴望されている、というような風潮がございますねえ。そんなことで、あの本の題も、私の気持とはちがうんですが、あんなふうに、出版社の方でつけてしまったんでしょう。

井深 私もねえ、教育のことだんだんやってきましたら、どうしても赤ん坊の教育というところへ……結論的になってしまいましたんで……。魂のはいった教育というのも、何とていうか……規律とか、秩序とか、そういうカチツとしたものは、ゼロ歳から二歳ぐらいまでの、動物的なしつけから生まれてくるんだろうと……そういう想定で、いろいろやっているんです。

石原 ま、胎教ということがいわれるぐらいですから、まして生まれ出た赤ん坊であれば、すぐにも教育の対象になるでしょうね。私、一番驚いたのは……感動させられたのは、アメリカで見たんですけど、まだ、ハイハイしてる子ども……立って歩けないうちから、水泳をするんですねえ。要するに、動物的本能で、赤ん坊が、水にもぐって物を取ってきたりする……あれはちょっとびっくりしました。

井深 五ヶ月で水に浮かせると、浮くんだけれども、遅くなるとだんだん手がかるんですねえ。

石原 そうです。

井深 私、基本的には、そのことが、やれるときにやらなきゃいかんというのが、教育の本義だと思うんですよ。日本の場合は、だいたい、時期を失ってから……あるいは最適なときをはずしてから、一生けんめい無理やりやってる……それが日本の教育の姿であるような気がするんです。私ども、ま、それに対して、レジスタンスしているわけなんですよ。

石原 なるほど。

井深 私の考えではね、特にゼロ歳から満一年ぐらいまでは、こりゃもう徹底的に動物的なしつけで教育していくべきだ、と……それから、一歳から二歳ぐらいになって、だんだんその子の長を認めて、ひっぱっていく……。いずれにせよ、ゼロ歳から二歳ぐらいまでは、親が思うままに、親の責任においてしつけなきゃいけないと思うんです。それを、物を言えるようになるまで放っておいて、それからこんど、ギャアギャア、スパルタ教育をやったって、それじゃあ、もう、手遅れだと思うんです。

あんがい、うかつな母親が

石原 やっぱ赤ん坊のときから、それなりの自我というものはあるんでしょうねえ……ま、そのあたり、非常にむづかしいところだろうけど。

井深 いや、私ね、この間、司葉子さんと対談したんですけど……あすこの赤ちゃんは六月ぐらいだけど、いっぺんもおむつで大便したことないそうですね。

石原 はーん？

井深 大体時間もきまっているし、赤ん坊の表情をみてますとわかるんで、おむつはずして、紙の上に寝かせるんだそうです。近頃は紙の上に寝かせると、無理にでも、自分でいきんでね……出そうという努力をするんですってねえ。

石原 そういうことは、誰が葉子君に教えたんでしょう。

井深 ああ、それは、非常にいいナースというか、聖ルカ病院の育児の非常に練達の人が面倒をみてくれてるんですね。そりゃもう、赤ちゃんが何を訴えているか、非常によく読みとって……そしてまた司さんの赤ちゃんが非常に表現力の豊かな子で、いろんな喜怒哀楽をあらわすんだそうですひちょっとオーバーかも知れないけど、司さんが口紅をつけていると喜ぶし……（笑い）着ているものの色柄も、きれいだと非常にうれしがらんだそうです。そういう観察を、司さん自身もよくやっておられて、“時間があったら、赤ちゃんといっしょに、どうやって暮そうか”と、一生けんめい考えておられるらしいですね。私、この間、感心しました。

石原 ほう……そうですね。あの人、いいお母上さんなんですね。

井深 なかなかいいお母さんですよ。

石原 しかし世の中には迂闊な母親が多いですよ。私の家内もこのごろ……、私のところは四人の男の子がいるんですが、一番下の子が幼稚園の三年保育の二年生になったところから、やっと、子どものかわいいことがわかってきたっていうんですね。

井深 ははーん。ハハハハ。

石原 “それまでお前、何やっとった”っていいましてね、(笑い)……とにかくたくさんいて、手がかりすぎて、“無我夢中でやってきたけど、このごろやっと、子どもを眺めて、子どもの面白さとか、かわいさとかがわかったような気がします”っていうから、母親なんてのは、お前ぐらいが平均なんだろうけど、ずい分頼りないもんだなあって笑ったんです。

井深 いやいや……

石原 しかし、そうむつかしいことじゃなしに、ちょっとした心掛けで、こどもの一生ってのは、どうにでもなりますよねえ。

井深 まあ、いろいろなことがいわれてますけど、お母さんと赤ちゃんがコミュニケーションすることによって、赤ちゃんの頭脳は、加速度的に開発されるんですね。赤ちゃんか何を訴えているか、何を欲しているかを読みとって、“ああ、そうか、そうか”といいながら答えていくことで、母と子はコミュニケーションできていくんですね。そして、それが一番最初の頭脳の開発になるわけでしょう。だから特別のことをしなくても、愛情をもって子どもを見ていれば……。司さんもつくづくそうっておられましたけど、いま、お母さんたちが、ずい分暇になったというけれども、結構やはり忙しい……なかなか子どもにかかりつきりにはなれないものなのに……、“私は、いいナースがついてくれて、十分子どもを楽しむことができるのは、大変幸せなことだ”って。あの忙しい人が、そういうことを言っていましたからねえ。私、これには感激しました。

石原 子どもが一人のうちはね……二人、三人になってくると、お母さんも集中的でなくなるんですね。私の友人に、あまり目立たないけど、斜頸の男がいます。それ、私、気がついて、うっかりきいたんです。ところが、やっぱり自分で首のこと、気にしてるんですね。彼は非常に親を恨んでましたけどねえ。子どもがたくさん家庭で育ったんで、やっぱり親が気がつかないらしいんです。あれはもう、なおせばなおるものなんでしょう？親が赤ん坊のときに気が付いて、マッサージでもかけてやれば……。貧乏なうちじゃなかったんですし……。一生あんな妙な思いをしなくてすんだのに。この例なんかは、非常に歴然とした方ですけど、いろんな意味で、大きな厄介な荷物を、子どもが背負わなくてすむように、気を配ってやることができるはずですよ。

井深 親の配慮でどうにでもなる時期にね、一応の人間的な……まちがいのない基礎を……例えば、人に迷惑をかけちゃいかんとか、静かにしろといったら静かにしていると、そういう基本的なことは、日常生活の中で教え込むことができるし、また、そうでなくちゃならないんじゃないか……と。そういう基礎を何もやらないでにおいて、やりたい放

題の人間にしてしまってから、お前、いかんよ、駄目だよっていうんでは、こりゃもう、反抗心を育てるだけになるんじゃないかしらん。

石原 半分おもちゃか、置物のような形で赤ん坊を扱う親が多いような気がしますね。

井深 基本的なしつけとか、それから障がいがある場合の対策とかというのは、非常に時期的なものが存在するんですね。それをみんな忘れてるんです。例えば小児マヒにしても、少し早く……多少かわいそうでも、ハードトレーニングをやれば、そんなに目立たないようにすることができるんですね。

石原 ははーん、

井深 例の松本の鈴木先生のところに、小児マヒの子どもを……せめてバイオリンによって、自分を慰めることができれば、と思って……こりゃ、ちょっと暴力的に……お母さんが血みどろになって、一生けんめいやらせたんですね。三歳ぐらいの子どもでしたが……そしたらバイオリンがひけるようになっただけじゃなくて、小児マヒの症状まで、相当よくなってきたんですねえ。ですから、障がいのある子どもほど、はやく対策を講じる必要があるんです。そこがなかなか……そういう踏み切りができないんですねえ。定説として認められてもいないし……

釘をうつだけでも天才的

石原 ですからね、幼児教育、幼児開発って、小学校でも大変なのに、赤ん坊のころから教え込むなんて……という錯覚を、一般に持ちがちなんでしょうけど……

井深 そう、そう。

石原 このごろの青年を見てますとね……自分について、たかをくくっていうのかな……あきらめるっていうと大げさだけど、自分の人生を、たかをくくって捨てちゃう……非常に平凡に墮することで結構なんだ、というようなところがありますねえ。自分の持っている特性とか、個性とかいうものを、自信をもって……俺は、とにかく、釘を打つだけは天才的にうまいんだ、とか、何でもいいから、一芸に秀でて、何か人から一目置かれるようなものを持ってる人間てのが、少なくなりましたですねえ。それ、やっぱり、子どものときに、親が何ていっても一番身近にいますから、そういうものをみつけてやらなきゃいけないんでしょうけど……。結局、学校の先生まかせで……。

井深 私の息子が、自分の方からバイオリンやりたいって、幼稚園のときに言い出しましてね、鈴木先生なんかについたわけじゃありませんから、習い方はへたでしきたよ。息子は発育が非常に遅れてまして、小学校の頃はコンプレックスを持ってましたね。それが、何かのとき……学会か何かのときに、皆の前でバイオリンをひいたんですね。そうしたら、それから皆の見る目も変わってきたし、自分でも、こりゃ、やれる……という自信がついて、それからいろんなものが、ずうっと変わってきたんですねえ。いま石原さんのおっしやっような……一芸というか、特徴のようなものを生かすやり方をさせずに、

同じような平均点的な子どもばかりこさえてるんですよ。

石原 小学校、中学校、高校の六三制っていうのもおかしいですよ。ある意味で悪しき公平ですよ。どうも何か平均値ばかり追い回して、ズパ抜けた人間を先へ進ませずに、いつも待たせてる……

井深 日教組はとび級なんかを、目のカタキにして反対してるんですね。

石原 非常にやすっぽいヒューマニズムですねえ。

井深 あれ、どうしても私どもにはわかりませんね。その人の特色を生かして、できる子はどこまでも、どんどん伸ばしてやらせていけばいいと思うんですがねえ。

石原 それに、学校で教える科目っていうのも、人間の能力の全部じゃありませんしね。学校でやる学業ではだめだけど、こういうことでは絶対に人に負けないんだ、という、相対的な自信というものを、自分で発見して、握っている……そういう教育の仕組みになっていないんですよ。学校できめるランキングがそのまま……要するに一生、ついて回るみたいな仕掛けになっていて……

井深 湯川先生がいておられるけど、点数を足して、科目の数で割った平均点なんて意味ない、二乗にしてから点数を出さなきゃ嘘だって……。本当に特徴のある人間っていうものがいまの学校制度に応じ切れないですよ。異色のある人っていうのは生まれてこない……非常につまらない教育になってるんですね。

中学校を途中でやめさせて

石原 初等、中等、高等も結構ですけど、例えば三年の終るときの試験を厳密にチェックするとかして、その途中……最初の一年目ぐらいは、何も勉強せんで、遊んでいても、他の好きなことしていてもいい、とか、そういう大きい捉え方があると面白いと思うんですが…

井深 膨大な予算をたくさんの人を動員する教育ですけどね、一番問題にしなきゃならないのは、あれだけ長い年間っていうものを、学校に拘束しておいていいんだろうか、っていうことですよ。そんな必要があるんだろうか。幼稚園までに、することをちゃんとやっいたら、あとは相当フリーな形にしてもいいんじゃないか……。たとえば、世の中に出て働いて、もういっぺん、学校へ行きたい、という必要を本当に感じた人は、それから学校へはいればいいんだ、と。ニーズが起きてからの勉強っていうのは、まるで効率がちがうでしょうし。社会をまるで知らずに、長いことズルズル勉強して、はじめて実社会へ出て、まるで無力だと感じたのではまずいでしょうね。

石原 谷川俊太郎っていう優秀な詩人がおりますね。あれは例の谷川徹三さんの息子さんですが……お父さんもお母さんも変わった人で、子どもはいらないうつというんで、結婚しても子どもはつくらないつもりだったそうです。ところが母方のおじいさんが、絶対、孫をつくんなきゃいかん、と、そうでなければ別れさせるってなことを言った。(笑い)そ

れで、しょうがないから子をつくった。

井深 アハハハハ。これは.....

石原 それも一人だけということで、分娩じゃなく帝王切開で産んだ。ところが生まれてみると、お母さんも夢中になって育てたらしいんですね。谷川徹三さん、息子を小学校までは行かせたけど、中学校は途中でやめさせちゃったんです。そして、お父さん自ら、独得の教育をした。もちろん大学出なんかよりずっと教養の高い男になったし、詩人という職業のせいもありますが、親のそういう教育のおかげで、いまでも勉強っていうと、非常に楽しみながら、どんな新しい知識でも取り入れますねえ。

井深 自分で獲得していくんですねえ。

石原 私はね、非常に面白い教育のケースだと思うんですけど、さて、自分ではとてもできないなァ。おそらく、二番目、三番目の子どもができてたら、谷川徹三さん、面倒くさくなって、きっと学校へ入れちゃったと思うんですよ。しかし、谷川さんの場合、そういう教育を受けただけあって、ある意味で平和さみたいなものを持った、いい人柄ですよ。それがまた、彼の芸術の独特の宇宙観になってますね。彼自身もまた、自分の子どもを変った育て方していますし.....あれ、しかし、普通の家庭の.....

井深 一般にアプライするわけにはいかんでしょうけどね。鈴木先生の門下生で、世界で有名な楽団のコンサートマスターになっている人が五、六人いるんです。一番有名なのは豊田耕児...ベルリン放送管弦楽団の、コンサートマスターですがね。まだ全部三十代なんですよ。そして、彼らみんなに共通してることは、中学校教育しか受けていないんです。それでいて、三十代で、しかも、うるさいおじいちゃんばっかりの、格式のある管弦楽団のコンサートマスターをやってる.....豊田耕児なんか、もう九年間やってて、放してくれない.....彼はソリストとして立派にやっていけるんですが、放さない。ということは、やはりリーダーシップといったものが、早教育によって養われるっていうことらしいんですね。コンサートマスターっていうのは、ただテクニクがすぐれているだけじゃなくて、仲間をどうやってつかんでひっぱっていくかってことや、集団を代表しているんな交渉をしたり.....しなきゃなりませんわね。中学校しか出ていない、三十代の外国人に、それをまかすっていうこと、ちょっとこれ、驚異だと思うんです。それが門下から、一人や二人じゃなく、六人ぐらい出てる。ま、一方からいうと、コンサートマスター的な教育しかされていない、という.....芸術家たちからの批判もありましょうけど、ね。ですから、ただ学校をズルズル出るってことが、その人間にとって、どれだけ良かったか、悪かったか、全く問題がありますねえ。

口で教えなくとも、態度と行動で.....

石原 例えば、子どもが何かに熱中して、夜おそくなってくると、母親っていうのは、もう時間だから寝なさいっていいにきて、ねかせてしまいますでしょう。それはやっぱりい

かんと思うんですね。あんまりくだらんことやってるのなら寝かしてもいいけど、学問にかかわりあう関心事だったら……

井深 熱情をこめられるものを、果させてやらなきゃいかん……

石原 ええ。あした起きるとき苦しむのは自分なんだから、その調節は自分でさせればいいんですからね。

井深 あんまりいまのお母さんは、あてがいぶちですよねえ。こうしなさい、その次はこうしなさい、それをしちゃ駄目ですよ、という……ねえ。

石原 私自身は女の子のいない兄弟でしたから、女のケースは何もわかりませんが、父は私に、男として……というより人間としてでしょうけれど……例えば屍体というものを私に見せたり……

井深 ほ、ほう、それはおいくつぐらいのとき？

石原 小学校の三年か四年のときでした。それ、小説に書きましたけど。父は山下汽船の支店長をしておりますね、遭難した船があったんですよ。……人間の死顔っていうのはじめて見ました、そのとき。

井深 お父さまは、どういう意味で、見せなすったんでしょう。

石原 それ、非常に勇敢な行動で死んだ人なんですね。自分でとびおりてロープを結びつけて、結局、溺れて死んだ航海士ですけど。そういう配慮とか……それから、これは平凡なことかも知れませんが、よく朝の散歩に強引に連れていかれて……私には強いませんでしたが、自分では柏手を打って、おひさまを拝んでましたよ。こういうのはやっぱり、何か情操として残りますですねえ。

井深 偶然ですけど、私の義理の父になった人が、山下汽船でしてね、神戸で、わたし、小学校のときは、もう、毎朝、うしろの山を三、四十分歩いてこないと、朝飯くわしてもらえないんですよ。そういう鍛えられ方しましたから、足だけは、いまでも達者ですけどね。何かそういう大きなものってのは、父親というものは、与える力があるようですね。

石原 父は夭折しましたですからね。高血圧だったんですが……海運業不況のときで、母が非常に心配しておりました。結局、会議場で倒れて……死にましたんです。四十前から、もう高血圧で、ずい分自分も療養しておりましたが。例えば、普通、ちょっとできないと思うんですけども、自分のうちで断食をして……三十日もしましてね。よく家族が自分の目の前で飯を食うの、我慢して見ていられたと思うんですけど。

井深 ほう……

石原 まあ、私たちが食物のことで、わがママを言ったりすると、普通のときならおこらないのに、断食中だと、非常におこったりしましたですね。自分がおなかが空いてるから、おこるんだなって、ぼくらは、非常に父が断食するのがいやだったです。

井深 八八八八八。

石原 しかし、そういうときは、子ども心に、父親が目に見えない敵と戦っているっていう

ことを、とっても強く感じましたね。……とうとう負けて死んだとき、何か戦いに敗れた戦士みたいな気がして、父親の死に顔を独得の感慨で眺めましたけどねえ。……そういう影響で……ぼく自身の子どもも、また、男の子ばかりですから、自分じゃ、独得の教育のつもりでやってはおりますけれど、ね。私のところは海のそばだもんですから、いつでしたか、台風がきたとき……たいして危険はないんですよ、自動車もこなくなつて、波が打ち上げるだけで……。子どもといっしょにヨットの合羽を着て、ですね、はだしでしけの中を歩いたんですが……。危いときはロープで結び合つて……

井深 挑戦ですね、そうすると。

石原 子どもは、とっても面白かったっていいですね。やっぱり自然の力に曝されるということは、強烈な体験ですね。まだ下の子は無理ですけど。それから、よく徹夜で海岸を歩いてみたりもするんですよ。

井深 はーん。

石原 こどもたちは徹夜すると、ヘトヘトになりますけど、世の中が寝しずまって、また、こう……払暁と共に甦ってくるころなんか……

井深 別の世界を経験させられるわけですね。

石原 別に口では教えませんがね、何も。子どもは何か得るんじゃないかと思います。

井深 面白いなあ、それは。

石原 まあ、戦闘的な男が好きですから、ぼくは。そういうふうな人間にしようと思って……。親が割とガサガサしてますとね、子どもってのは、割とキチンとした……亭主を家で待ってる女房みたいな形になつちゃうものですから、そういうことにさせまいと思つてやってるんですけど。

月一回のセレモニー

井深 私、会社なんかで見えますと、ボーイスカウトの経験をした人っていうのは、いざというときに、非常に役に立ちますねえ。

石原 ああ……

井深 どういうんだかわかんけど、ただ学校生活だけやってきたのと、何か……。いまおっしゃった勇ましきみたいなものを……。特に男の子には、与えとく……。っていうのは、あとになって、違ってくるんじゃないでしょうかねえ。バイオリンの教育なんていうのも、ある意味では、非常に興味を持ってチャレンジする……。チャレンジのあり方だと思うんですよ。何かはっきりした目標といったものを持って、自分をそれに投げ込むというような、そういう育て方も、これからの人間には、時に必要だという気がしますね。

石原 ま、そういうふうに、親が何か実験してみたらいいと思うんですよ。試みというか……。親が子どもを試すころみっていうのは、いずれ、あんまり突拍子もなく子どもをそこなうようなものじゃないでしょうから。

井深 そりゃ心配ないと思いますね、やりたいことをやって……

石原 そういうことをしないで、子どもはずるずる大きくなっているっていう気がするから……。私、こんどの本に書いたんですよ。近頃はなんとかラインとか、ハイウェイっていうのがどんどんできてるけど、親子でがんばって歩くという経験をね……。まず二千メートル以上の山に……親が若いうちがいいですけど、子どもがあんまり小さいと困りますが……歩いて登ってみること、いいかも知れないと思うんです。長い旅とか……そういうのは、時間はかかるかも知れませんが、たいして金はかかりませんし……。

井深 そこで、本当の父親とのコミュニケーションというもののできる場があるわけですね。

石原 ええ。……場合によっては、親の方が先にへたることもありますからね。子どもが父親の後押しをしたり、あるいは気を遣って休ませたりするようなケースも……気圧の関係でおとながへばることもあると思うんです。もっと休もうとか、掛けようとか、お互いに思いやりみたいなものができてくると思うんです。

井深 お宅はお子さんたち、おいくつですか。

石原 上は中学校二年です。それから小学校の四年、一年、それから幼稚園。

井深 男の子ばかりですか。八八八八。

石原 いやもう、実に殺伐たるものですね。

井深 サツバツ……八八八八。

石原 飯なんか食ってますとね、要するに動物園の餌づけの時間みたいで、私はもう、このごろ、とってもしょに食えないもんで、一人で食うようにしてます。ところがね、この間アメリカの友人がきて、その息子がしばらくうちにいたんですが……その子が帰るとき……ちょうど私は旅行にいつている間だったんですけど……いつもみんなで食ってるテーブルにクロスをして……ただそれだけなんですけど……

井深 送別の格好をちょっと……

石原 ええ、で、みんなで飯食ったんだそうです。そしたら二番目の息子が、これは非常にいいことだから、これから、月に一回は、父親が坐るべきところにちゃんと坐って、こういうことを……食事をしようって提案をしましてね……（笑い）

井深 面白いな、それ。

石原 何のためにするんだっていったら……。“別に意味はないけど、ぼくは非常にいいことだと思う”って……。“いいことだろう……けど、めんどくさい”っていったら、“それぐらいのことはしろ”っていわれて……。（笑い）“わかりました”って。それで約束したんです。

井深 セレモニィが好きなんですね、きっと。

石原 そうですね。

井深 よくお母さんの方が早く亡くなって、お父さんが一生けんめい育てたっていうケースでは、ことによるとエキセントリックな……そういう面が出ますけど、やっぱりお母さんの愛情と両方で円満なしつけになるんでしょうねえ。しかし、テクニクとか、物の

考え方のきびしさっていうことでは、お父さんの方が、冷酷にやれるんじゃないでしょうかね。

石原 しかし、幼児になると、もう父親の及ぶところじゃありませんね。やっぱり母親の…

井深 ええ、けれどね、父親が小さいとき、本を読んでくれたなんてことが、非常にあと大きく影響していることもありますよ。あるいは、日曜日に、お父さんが忙しいのに、あそこ、ここに連れてってくれた、なんてことが、非常に子どもの中に、大きくなってからも、残ってるとか……接する時間は短いけれども、父親の影響力ってのは、相当あると考えなきゃならないですよ。

石原 それはありますね。

信仰は高度な情操

井深 教育の中に、どうやって興味を持たせていくか……というより、自分が何かに興味を持って、自分で開拓して進んでいく……そういった教育のあり方というものが、非常に欠けていると思うんです。特に理科教育なんていうのは、特にそういうことがやりやすいはずなのに……どうも、文部省できめたガイダンスばかりにあわせてやっているようで……

石原 私はね、少し話がちがうけれど、このごろ、ちょっと……小学校、中学校、高校なんかで……聞くところによると、理科的志向が非常に多くて、文科的志向が少なくなったということなんで、ちょっとおそろしいような気がするんですよ。何か、いまの学校教育のカリキュラムの組み方に問題がありそうに思うんですけど。

井深 ええ……もっと小説とか、そういうものに親しむような導き方ってものがありそうですね。漫画だけですませちゃうような傾向がありますからね。私、よく例にひくんですが、私の会社の者で、母親が音痴だという自覚があるもので、生まれたときから、わかってもらわなくても、子守唄の代りに本を読んでやったんですね。そうしたら、幼稚園にはいるよりずっと前に、よく読んでもらってる本の中の字や話を覚えちゃって、おやじさんがまちがえて読むと、指摘するんですね。それから漢字に興味を持ち出す……いま小学校の三年ですけど、物凄く国語の能力ってのは、抜群ですね。お父さんの知らない間に、北欧の作家のものがえらく好きになって、丸善へ行って、店の人を困らせるぐらいなんだそうですよ。ですからね、ちょっとした親の考え方によって、ですね、非常に素直に、無理せずに、進路というか……理科的志向か、文科的志向か……影響を与えることができるわけですねえ。そりゃ、繰り返し、くりかえし読んでやったり、そういうことは手間をかけてやらなきゃいけないけど……。

石原 ええ。

井深 ですから、その影響力でね、人間的に正しい、まちがいのない、良識的な人に育てる

.....そのためのガイダンスというものは、いったい何だろうか.....もう少しはっきりさせていきたいというのが、今の私たちの考えなんです。むつかしいことじゃなしに、案外シンプルな、いわば動物的なものの中から.....物を考える心とか、あわれみとか、人のために尽すとか、そういう心が湧いて、形づくられるんじゃないだろうか.....と。理屈がわかるようになってから、理屈で教えるのでなしに、もっと素朴な.....。例えば信仰にしても、おとなになってからバイブルを読んで、なるほどと思ってはいったキリスト教と、小さいときから身をもって感じさせられてはいった信仰とは、全然異質なんじゃないか.....つまりそういう導き方っていうものが、あらゆる分野で、可能なんだろう、と考えるわけですよ。

石原 信仰だって、あれは非常に高度な情操ですからね。官公立の学校で、宗教教育を禁じているっていうのは.....

井深 ちょっと、あれは、かたくなですね。

石原 何もマホメット教まで広げることはないけれど、いろんな宗教の中から選択させたって.....キリストとかお釈迦さまの話ぐらい、当然、してもいいと思うんですよ。

井深 私は、日本で思想というものが非常に欠けているのは、欧米の場合、キリスト教というものがあって、それを支持する神学というものと、一方にそれに反対するプロテストがあって.....そういうことで切磋琢磨されたから、いろんな思想が湧き出している.....日本の場合、そういう地盤がないんですね。

石原 そうですよ。キリスト教のような血みどろな戦いっていうのはなかったですねえ。この間ね、ゴルフ場でばったり古い友人に会いましてね。東大から通産省の役人になってたんですが、やめましてね、どこか石油会社へ移ったんですね。一人でコースを回ってたんで、途中から仲間に入れて話したんですが.....ぼくは思わず、“役人やめてよかったね”って言ったんです。(笑い) そうしたら当人も、しみじみ“よかった”って言ってました。どうも日本には役人みたいな政治家が多すぎて.....。ということは日本の教育の中に役人養成的なものが.....根底にあるんですね。私の場合は、非常にいやな高等学校にいたもので、一年休んで絵を描いて、自由美術なんかに出したりしてたんですが、おやじが死んじゃったものですから公認会計士にでもなろうかと思って一橋へは行って法律やり出したんです。とても私には性に合わないんで、社会心理学に替ったんですけど.....。つまり東大へ行って、何でもこなして.....っていう連中は、みんな大蔵省、外務省へは入ってるわけですよ。そういう秀才っていうのは、高等学校のいろんなエピソードの中で、実につまらない存在だったですね。

井深 ウフフフフ。

石原 私たちの場合は、いろんな面白いのが、次々はいってきましてね。

井深 その最たる者が、いま、いるじゃないですか。ハハハハ。

石原 そうなんです、ハハハハ。ぼくは、ああいう人は、客観的に見ると、実に人間として面白い。.....興味がありますね。ああいう人生というのは、どういうものかと思って、

ね。

井深 アハハハ。まあね、ある年、大蔵省へはいった研修生が二十二人だった……そしたらそのうち二十一人が東大、一人だけが京大、ザッツオールなんですねえ。それでいったい、いいんだろうかというわけですよ。これには進駐軍もびっくりしたっていいますがね。

石原 それが全部、日本の価値観の根底にありますわね。私いまでも覚えてますがね、中学校のころ、音楽のカリキュラムが混乱してたんで、教科書が何回も変りましてね、そんな中で非常にエキゾチックなジブシィ音楽があったんです。ある時間の、後半になって、その曲に移るんで、先生が弾いて聞かせたわけですよ。それがとても私たちの感覚を刺激して、時間が終わったとき興奮してましてねえ。次の週の時間まで待ち切れずに、休み時間に覚えてしまおうと思って練習しはじめたわけですよ。それをやった人間を見ますとね……十人ぐらいいたんですが……学校で札つきの不良とかね、その後中退した奴とかね……東大とか一橋とか、そんなところへ行った奴は一人もいないですよ。でも社会へ出たら、みんな一国一城のあるじになって、実に面白い仕事をしてます。その時集らなかつた秀才で、教室で姿勢がいいもんで、音楽も優をもらっていたような奴は、勉強して東大へいったりして、せいぜい出世した人間で役人ですよ。みんなサラリーマンですよ。いつだか、フッとその曲を聞いて、ああ、あの時の連中、どうしてるかなあ、と思ったら、やっぱり、はみ出した、面白い仕事を社会でやってるんですね。

両刀使いも幼児教育

井深 運動部のキャプテンというのは、私、ある意味で、人ができてるという気がしますけどね。

石原 会社なんか、それを多として、スポーツのキャプテンあたり、非常に尊重しますけどね。ぼくは必ずしも感心しませんね。案外スポーツ官僚みたくのがいるような気がしますねえ。

井深 そうでしょうか。私はまた、逆の場合の例で……私の友人の娘さんが嫁に行ったんですが、その息子三人が全部京大出なんです。ところが一人だけが非常に人間も丸いし、融通がきくし、温い人柄なんですね。おかしいなって思ってみてましたが、あとで、そのお母さんに聞いたら、終戦後の、非常にきびしいときに、鈴木さんの早教育を……ずいぶん骨折って遠いところから通って、受けさせたんですね。それでいまでも音楽愛好家ですけど、どこか人柄がちがうってことを、そういう予備知識なしに、私、わかつたですねえ。私がこんな問題に首をつっこむことになったのも、鈴木先生の早教育が、音楽だけの問題じゃなしに、人間づくりにまで影響を及ぼしている……頭脳づくりにもいい結果を及ぼしている、と……はやくああいう複雑なことに着手しただけで……はじめはそりゃ、なかなか大変だけど、非常に効果がある、という事実を認めたからなんですね。

石原 一般に、非常にまちがえられているのは、幼児教育というと、すぐ、天才教育とか、英才教育とか、そういうふうに……

井深 ええ。幼児の才能教育というと、小学校、中学校のノルマを、下まで下げて教える、というふうに……親のみえでやるように考えられるんで……。ある意味で、そういう形で、子どもを育てる親も、中にはおりますものですからね。

石原 私はね、人間てのは誰でも天才だと思うんです、哲学的な存在論になりますけど。自分がこうやってることが不思議で不思議でしょうがないし、この存在というものは、繰り返しながきかないわけですよ。人間がいかにかげがえがないか、という認識がないもので、さっきも言ったように、若い人たちが“俺の人生、平凡でいいんだ”なんていうことをいう……。長所も欠点もあって、こういう顔をしてこういう名前の人間てのは、一回しか存在しないんだ、という認識を、親が持てば、自分の半生をふりかえってみて、基本的な失敗というものもあるでしょうし……子どもの可能性というものは、もっと早く、親が真剣に開発して、みつけなきゃいけないんじゃないか。そうすれば、進学するときも、迂闊な決定はしないと思うんです。小学校のころから、どういう向きか、よく観察して、早く発見するように努力すべきなんでしょうね。人間というものは、とにかく一人一人、かけがえがないんですから。

井深 だいたい、文科、理科というカテゴリーが、もういけないですわね。

石原 ええ、おかしいですよ。

井深 もっと、自分が行きたいところへ行ける自由さってものがあっていいと思うけど。どうも自分の尊さというものを教えられないような教育方針ですね、いまは。良い小学校や良い中学校へはいるにはどうすればいいか、ということばかりに狂奔しちゃうんだけど、人間の特徴といったものをみつけ出すには、やはり幼稚園前に開発しなくちゃならないんじゃないか……。私は、幼稚園までに、いろいろ性格もきまるし、能力もきまるし……その時期っていうものは、ほとんどお母さんの教育なんです。ところが教育ママというのは、その時期は放っとして、そのあと、あと、をさわぎ立てるんですね。そして大体のお母さんは、幼稚園が悪いから、学校が悪いから……学校の先生がなっていないからってことばかり不平を言うんですね。時に、石原さんは左利きですか？

石原 両刀使いなんです。小学校のころ、なおされましてねえ。直すのは全くまちがいなんだそうですね。面白い先生がいましてね、直さなくていい、と言われましたんで、救われた思いをしました。

井深 一種の幼児開発なんですねえ。(笑い)

おわり